

令和5年度
尼崎市文化ビジョン（第2次）推進懇話会
報告書

令和6年9月

尼 崎 市

1 趣旨

文化芸術基本法では「地方公共団体は、基本理念にのっとり、文化芸術に関し、国との連携を図りつつ、自主的かつ主体的に、その地域の特性に応じた施策を策定し、及び実施する責務を有する。」と定められています。

こうしたなか、尼崎市では本市の最上位計画にあたる「尼崎市総合計画」の分野別計画として、平成29年に尼崎市文化ビジョンを策定しました。その後、令和4年度に改定を行い、令和5年度から令和14年度までを取組期間とする「尼崎市文化ビジョン（第2次）」（以下「ビジョン」という。）を策定しました。

ビジョンでは、その推進にあたり、市が責任を持って文化芸術振興の役割を担うことを明確に示しており、その評価にあたっては、「本市の取組の柱」に基づく取組を定性的な視点から評価することとしております。それを受け、「尼崎市文化ビジョン（第2次）推進懇話会」（以下「懇話会」という。）を設置し、市民や専門家等の第三者からの意見を参考に取り組の効果を検証し、施策評価に反映することで、PDCAサイクルを通じて効果的な文化施策の展開を図っていきます。

2 懇話会について

懇話会は、学識経験者や文化活動を行っている者等から構成され、文化事業等に関する意見交換を行います。

尼崎市文化ビジョン（第2次）推進懇話会 委員（50音順）

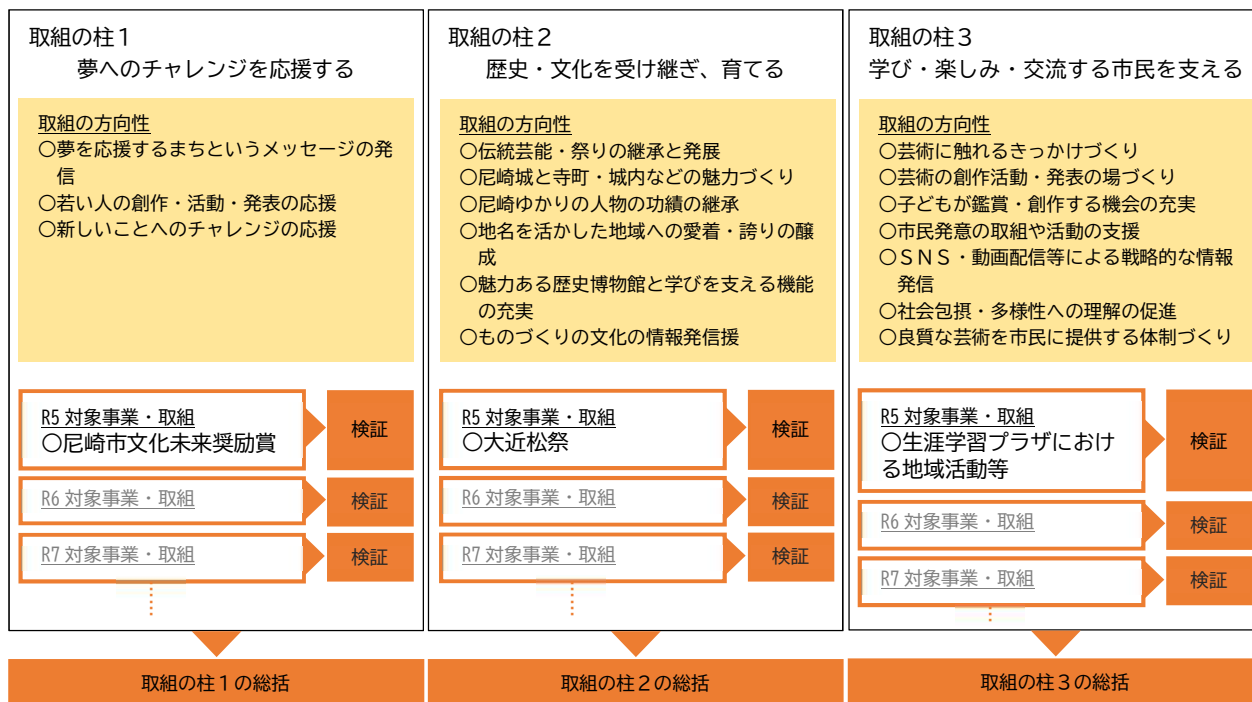
氏名	所属
大永 尉恵	子育てサークル「姫ぱら」代表 放課後等デイサービス「ヤシノキ」代表
狩谷 春樹	生田流箏曲「新絃社」三代家元 尼崎芸術文化協会運営委員
辻川 敦	尼崎市立歴史博物館職員
中田 秀人	アニメーション作家 A-LAB アドバイザー
船木 成記	総務省地域力創造アドバイザー 公立諏訪東京理科大学理事、尼崎市顧問
善見 壽男	富松神社宮司

3 令和5年度の実施内容について

ビジョンの3つの取組の柱の方向性に沿った取組が実施されているかを検証するため、毎年度、複数の事業・取組を対象として、懇話会による事業視察及び意見交換等を行います。

令和5年度は、取組の柱1「夢へのチャレンジを応援する」の事業として尼崎市文化未来奨励賞を、取組の柱2「歴史・文化を受け継ぎ、育てる」の事業として大近松祭を、取組の柱3「学び・楽しみ・交流する市民を支える」の取組として生涯学習プラザにおける地域活動等の事例を取り上げました。さらに、社会の基盤となる広義の「文化」について議論を行いました。

取組の柱の検証イメージ



4 懇話会による検証結果

取組の柱 1 夢へのチャレンジを応援する

（目的）若い人の夢を後押しし、飛躍のきっかけとなる機会を提供することや、年齢を問わず新しいことにチャレンジする人を応援することで、本市が夢へのチャレンジを応援するまちであることを発信するとともに、その活動を広げていく。

対象事業 尼崎市文化未来奨励賞

第5回尼崎市文化未来奨励賞受賞記念展「声声が灯して」の視察を行い、意見交換を行った。（視察は、各委員が個別に実施。）

事業の概要

尼崎市文化未来奨励賞は、芸術性の高い優秀な作品等を創作し、全国規模の活動を展開しようとしている者を顕彰するとともに、市内で発表する機会を持てるよう支援することにより、市民の芸術文化創造への意欲を喚起し、本市の文化振興を図ることを目的としている。受賞者には、発表等奨励金として100万円を上限に支援する。

第5回尼崎市文化未来奨励賞は美術家の小出麻代氏が受賞し、受賞記念展「声声が灯して」が令和5年11月3日から26日までの土日月祝に、尼崎市総合文化センター9階（旧結婚式場）で開催された。本展では小出氏が様々な人にインタビューを行い、オブジェクトや映像などの新作インスタレーション作品を展開した。



検証結果

評価された点	○土地・場所、歴史、インタビューから作品化されており、鑑賞者に訴えかける展示となっていた。「この作家の展示をまた見たい。」と思わせるもので、本賞の趣旨に合致していた。 ○使用していなかった旧結婚式場を活用して開催することで、作家の思いを形にする支援ができたことも、若手芸術家の応援となった。 ○長年使用されてきた結婚式場が活用されたが、地域の施設や場所の意味・歴史を感じ取る感性を育てることにもつながる。
課題	○受賞者への支援は、受賞者の作品制作を後押ししてくれるようなもの（例えば、作品完成後に発表できる機会の提供等）も含めて、柔軟に対応したほうが良いのではないかな。 ○受賞者のフォローアップをすることが必要である。また、受賞者のアーカイブをすることで、チャレンジを応援するまちのイメージにつながっていく。 ○情報発信に力を入れる必要がある。尼崎の現在のアートシーン等の情報をまとめて発信したりつなげたりするコーディネーターのような人や役割が必要だ。

取組の柱 2 歴史・文化を受け継ぎ、育てる

（目的）過去から受け継がれてきた伝統芸能や祭り、本市ゆかりの人物といった様々な歴史・文化について、学び・楽しみながら、それらが守り伝えられ、まちづくりに活かされていくよう、まちの誇りとして育てていく。

対象事業 大近松祭

近松没後 300 回忌の節目となる「大近松祭-三百年祭-」の視察を行い、意見交換を行った。

事業の概要

久々知の広済寺には、人形浄瑠璃（現在の文楽）と歌舞伎の世界で活躍した劇作家 近松門左衛門の墓があり、昭和 11 年に、広済寺周辺の地域の人々によって、近松の偉業を顕彰する「大近松祭」が初めて開催された。

「大近松祭」は、広済寺及び近松記念館周辺の地域の人々を中心とした近松祭協賛事業実行委員会が主催し、毎年 10 月下旬頃に開催している。

令和 5 年は「大近松祭-三百年祭-」として、例年より充実した内容で行われた。（文楽、記念式典、記念対談、落語、宝塚 OG ショー、浄瑠璃、近松音頭など）



検証結果

評価 された点

- 近松が人形浄瑠璃だけでなくいろんなエンターテインメントに影響している文化なのだと知ることができた。近松を多様な形で受け継ぐ意義を感じる催しである。
- 大近松祭は地域の実行委員会の人々の熱意で成り立っており、地域主体のお祭りである点が評価できる。また、地域社会のつながりをつくる行事として捉えられる。
- 下坂部小学校は、近松郷土学習に積極的に取り組んでおり、伝統芸能のクラブで体験することもできる。地域の思いが子どもたちに今後も継承されていくとよい。

課題

- 地域の人のネットワーク（実行委員会や近松かたりべ会等）が高齢化している。
- 文楽を間近で見ることで、人形が生きているように感じ、その感情を感じることができる。伝統文化は、現代の我々がそれをどう感じて、どう伝えられるかが重要だ。
- 伝統文化を継承するには、子どもたちにいかに興味をもってもらうかが課題である。
- 市制 70 周年を契機に「近松」を核としたトータルなまちづくりに取り組んだが、状況は変化している。今後どう位置付けていくかが課題である。昭和 50 年に建設された近松記念館も老朽化している。

取組の柱 3 学び・楽しみ・交流する市民を支える

（目的）市民が文化・芸術に触れる機会を増やし、文化・芸術を創作・発表できる場づくりを行うことで、学び・楽しみ・交流する市民を支えていく。

対象取組 生涯学習プラザにおける地域活動等

懇話会委員であり、子育てサークル「姫ばら」代表・放課後等デイサービス「ヤシノキ」代表の大永氏より、自身の生涯学習プラザにおける地域活動等について紹介していただき、意見交換を行った。

取組の概要

自治のまちづくりに向けた地域振興体制の再構築を進める上で、生涯学習の推進を図るとともに学びをきっかけとして、地域における課題解決等の活動を促進することができるよう、公民館と地区会館をともに学びと活動を支えるための施設として、平成 31 年度より生涯学習プラザとして運営している。

大永氏は、子育てサークルを立ち上げ、生涯学習プラザ等で活動したことをきっかけに、地域他団体と交流するようになった。地域でつながった人々とハロウィンイベントやお祭りを企画したり、「ミーツ・ザ・福祉」等に参加したりして、地域のつながりを育てる活動をしている。



検証結果

評価 された点	○大永委員のような地域の人たちの営みが、地域社会を作り、地域の活力になっている。 ○かつての公民館のイメージと現在の生涯学習プラザのイメージは大きく変わったと思う。 職員が声掛けをし、一人一人に寄り添う姿勢がある。 ○各生涯学習プラザでは、地域の中で何か相談がある人、何かイベントをやってみたい人が集まって交流する会（中央おしゃべりデー等）を開催しており、地域の活動的な人を見つける・つなげることができている。 ○地域イベントを企画・運営した人が、培ったプロジェクトマネジメントのノウハウを別のイベントをしようとしている人に共有することができれば、地域でいろんなことができる。
課題	○市役所が地域にとってもっと身近に感じられるように、気軽に相談できる窓口が必要である。また、様々な活動に興味をもって活動を見に行く、把握することが重要である。 ○「市民からもっと相談しやすいと思ってもらうにはどうすればいいか」を市職員全員が考えないといけない。 ○地域における文化事業は、事業の実施を目的とせず、そのプロセスで人々のつながりを広げていくことに重点を置き、それをマネジメントしていくことが重要となる。

全体を通して

令和4年度に改定した文化ビジョンでは、「第6次尼崎市総合計画」の中で、文化施策の位置づけが「地域コミュニティ・学び」の一施策となったことを受け、狭義の「文化」のみでない取組をしていくこととし、3つ目の取組の柱に「学び・楽しみ・交流する市民を支える」を掲げました。

懇話会で議論を進めるにあたり、改定に携わった船木委員より、地域コミュニティ・学びを基盤として「文化」を捉えるという改定の趣旨についての説明を受け、意見交換を行いました。

文化ビジョンの改定趣旨に関する意見交換（第1回）

委員から、「生涯学習プラザが機能しているか。地域の取組の裾野が広がったとしても、すべての市民が参加し実感できているわけでないので、その辺りのチェックが重要ではないか。」という意見や、「文化を広く捉えて、尼崎だったらこんなに文化が豊かであると発信出来れば良い。」という意見があった。

また、最終回の会議では、文化ビジョンの特徴でもある広義に「文化」を捉えることに関して議論を深めるため、佐野真由子氏（京都大学大学院教育学研究科教授）をゲストに招き、社会の基盤となる文化政策についての説明を受け、意見交換を行いました。

社会の基盤となる広義の「文化」について（第5回）

佐野氏の専門は文化政策研究で、「文化政策は、『人々の生き方全般の基盤となる、社会のあり方についての大きな方針』である。」と提唱しており、佐野氏が主宰する〈新しい文化政策プロジェクト〉が発表した「提言 社会の分子ではなく、分母としての文化政策」について説明いただいた。

委員からは、「単に文化活動を行うのではなく、なぜ自分が興味を持ったか等を考えることが大切ではないか。」という意見や「文化活動をする側は視野が狭くなりがちなので、既存の括りを取って自由に活動できるようにしていきたい。」という意見があった。また、「地域の人々が表現したことが地域の自治と学びにつながり、それが積み重なったものが文化になる。地域の狭義の「文化」が大きな「文化」を支えることができる。」という意見があった。

令和5年度は、狭義の「文化」分野の事業である尼崎市文化未来奨励賞、大近松祭を対象とするとともに、広義の「文化」の取組である生涯学習プラザにおける地域活動等を対象としました。次年度以降も引き続き文化を広義に捉えながら、検証していきます。懇話会として、今後も市民の学びと活動を支えるための行政の役割について振り返り、次の展開に活かしていくこととしました。

資料編

第1回懇話会の様子

日時 令和5年9月28日（木）14時から16時まで

場所 尼崎市役所 中館8-2会議室

出席委員 狩谷委員、辻川委員、中田委員、船木委員、善見委員（欠席：大永委員）

意見交換の様子

- ・尼崎はチャレンジを応援し、「うまくいかなかったら帰っておいで」というような挑戦する人を温かく支えるまち、人を育てる・育つまち。
- ・令和5年度からの「第6次尼崎市総合計画」の施策1は「地域コミュニティ・学び」であり、尼崎市は地域コミュニティを強化するため、地域振興センター等を改組して生涯学習プラザを整備してきた。行政にとって一番重要な地域コミュニティを今後どうしていくのかという施策の中に、文化施策も含まれている。
- ・尼崎市の文化ビジョンは「生活文化や地域性」と「アート・表現」の2階建て構造が特徴だと思う。第2次ではそれをさらに進めて、「コミュニティ」の上に「協働・文化」が組み合わさっているような感じ。
- ・この10年、20年で市が力を入れてきたことは生涯学習プラザ再編で、生活に根差したさまざまな取組を目指してきた。生涯学習プラザが機能しているか。地域の取組の裾野が広がったとしても、すべての市民が参加し実感できているわけでないので、文化ビジョンにおいてもその辺のチェックが重要だと思っている。
- ・市民も職員も学びの意欲が感じられる。また地域の人々の世間話の中にも文化・教育・学びがあると思っている。
- ・「地域コミュニティ・学び」をテーマに文化行政がどう進んでいるのかをチェックするのが私たち委員に与えられている役割だと思う。
- ・作品制作をする時、生まれ育った町が必ず出てくるので、自分の作品の中にも、地域の文化が入っているのかなと思う。誰かから与えられる経験ではなく、自分で暮らして、良い思いも嫌な思いもした経験が自分の力になる。
- ・自分自身視点が狭くなってしまうこともあるが、文化を広く捉えて、尼崎だったらこんなに文化が豊かであると発信出来ればいいなと思う。

第2回懇話会の様子

日時 令和5年10月22日（日）12時30分から
場所 近松記念館
出席委員 大永委員、中田委員、善見委員（欠席：狩谷委員、辻川委員、船木委員）
内容 「大近松祭-三百年祭-」の視察

第3回懇話会の様子

日時 令和5年11月21日（火）14時から16時まで
場所 尼崎市役所 議会棟3階 東会議室
出席委員 大永委員、狩谷委員、辻川委員、中田委員（オンライン参加）、船木委員、善見委員

意見交換の様子

テーマ「歴史・文化を受け継ぎ、育てる」（視察事業：「大近松祭-三百年祭-」）

- ・文楽を見るのは初めてだったが、足を踏む音や動きで、人形が活着ているように感じた。言葉は分からなかったが、悲しさや美しさを感じた。記念対談では、人形遣いになる大変さをお話されていたが、今は学校があつて学校に通えば人形遣いになれるという話が印象的だった。担い手が少ないという話については、体験会などをしたらいいのではないかと思った。尼子先生は、忍たま乱太郎のマル秘話をされていたので、忍たまファンがもっと来てくれたら喜んでいただろう。桂團治郎さんは初心者でも楽しめる落語をされていた。宝塚OGレビューショーでは、出演者と目があつてファンサービスしてくれたような気持ちになった。下坂部小学校の浄瑠璃クラブは今も人数が増えていると聞いて、子どもたちがやってみたいという気持ちにさせるのはいいことだと思った。最後の近松音頭は、着物の着方が素敵だった。
- ・時間は長かったが最後まで飽きずに見ることができた。今まで「近松のまちに住んでます。」と言っていたが全然知らなかった。知らない人はたくさんいると思うので、ぜひ大近松祭を知ってもらいたい。
- ・人間国宝の人形遣いには感激した。心中するシーンで一番盛り上がったのは興味深かった。全体で3時間は長かったが、趣向を凝らして、近松を受け継ぐ意義を感じる催しだった。近松が人形浄瑠璃だけでなくいろんなエンターテインメントに影響している文化なのだと知ることができた。
- ・近松公園は普段は静かだが、当日はたくさんの方がいてうらやましいとも感じた。子どもたちが出演して、自分のおじいちゃんおばあちゃんが見に来て…というのが楽しそうで、自分の町にもあったらいいなと思った。
- ・大近松祭の関係者から、「大近松祭は地域の実行委員会の人々の熱意で成り立っている」と聞いた。一方でヒト・モノ・コトの課題もある。ヒトの面では高齢化。すぐに若者が集まるのは難しいと思うが、下坂部小学校のような子どもたちが歳を重ねて近松への想いが備わっていったらいいなと思う。6年生になったら装束を着て舞うので、5年生は張り切って練習するそうだ。コト（お金）の問題もあるし、モノの問題は、近松記念館だ。歴史博物館のようにリニュ

ーアル等が今後必要になってくると思う。また、1階の展示室では近松かたりべ会の方が説明してくださったが高齢化している。大近松祭は、地域の人々が頑張って、行政が前に出過ぎないでいるのもよいと思った。

- ・近松記念館は今後耐震化とかいろいろ問題になってくると思うので、元々地域のものということだが、市も考えていかないといけない。
- ・高齢化という点では邦楽もそうだ。子どもたちにいかに興味をもってもらうかが課題になっている。三味線は動物の皮で作られていて、動物愛護の観点で課題もある。人もそうだが道具の点で子どもたちに邦楽を残せるのかという心配がある。
- ・文楽の学校があるのは画期的なことだと思う。邦楽は自宅やカルチャーセンターで教えることが多いが、カルチャーセンターでも邦楽がどんどん減っている。下坂部小学校のように伝統芸能のクラブが広がっていったらいいと思う。見るのと体感するのは違うので、体験できる場所が身近にあれば子どもが育つ。ただ、講師料など予算の問題もあるので実現はなかなか難しい。
- ・「近松」は市制70周年にコンセプトを打ち出し、当時は「尼崎には近松・寺町という素晴らしい文化がある。だから公害の町ではない。」とPRして悪いイメージから局面転換を図ろうとするものだった。今ではそんな発想の人はいなくて、「尼崎は近松だけでなく色々な多様性、また人の良さがある。」となっている。
- ・下坂部小学校は、自分たちの取組をプッシュしていこうとしていて、いい体制になっていると思う。
- ・近松については、モニュメントの手入れができておらず、地域の人々のネットワークも高齢化している。それを踏まえて市が「近松」を今後どう位置付けていくかということだと思う。
- ・尼崎のアイデンティティの中で、古典芸能をどうとらえるかという問題がある。近松にゆかりがあるという単体の事象だけでなく、それが地域の中で生まれてどう育まれてきたかということと、地域の特徴の中でどう呼び込めるかということだと思う。伝統文化は古めかしい骨董品のようなものではなく、今の暮らしや現代にそれを置いてどう感じてもらうかが重要。そういう点で、委員のように自分の体験を周りにうまく伝えられる人はとても大切である。
- ・古典芸能を古典ととらえるのではなく、「表現すること」ととらえてみてはどうか。尼崎は日本で初めて演劇祭が始まったのではといわれている。表現する・何かを伝えるということのモチーフとして古典芸能がある。大近松祭も、まちづくりの観点でいえば地域社会のつながりとして存在している。
- ・事業を運営する尼崎市文化振興財団、地域の方々、市をパッケージで見ながら、これまでとこれからの未来を見据えてどんな事業にしていこうか考えるのが重要だ。

テーマ「夢へのチャレンジを応援する」について（視察事業：「声声が灯して」）

- ・映画を見ているように感じた。詩もよかった。写真室の展示は、そこに新郎新婦がいるような温かい雰囲気を感じて、その中の1文が自分の琴線に触れた。また結婚式場というなかなか普段は入れない場所を使っているのもよかった。この人の展示をまた見たいと思えたので、未来奨励賞という名前はぴったりだと思った。土日祝月だけ限定なのはもったいないと思う。

- ・総文の結婚式場が会場になっていることにとっても興味を持った。展示の中に、“まちづくりによって都会の農地というのは、絶対に必要だと思ってたから。”という文が、私に語りかけている言葉だと思った。
- ・小出さんの作品は大勢の人に見ていただきたいと思う一方で、少人数でないと感じられないことがあったと思う。小出さんはいわゆる「リサーチ系」の作家である。その土地や場所、歴史や現地の人のインタビューを下調べして落とし込んだ後に、自身の作家性というフィルターを通して提示する。ただ単に拾い上げた情報をそのまま伝えるのではなく、見に来た人に感じさせる、想起させるスタイルの作家だと思う。最初の衣装室に作品を置いた理由を小出さんは、「自分の作品は造形ではないので鑑賞者が通り過ぎてしまいやすい。そこで部屋を暗くして照明を当てて、作品の世界に入ってもらえるようにした。」と言っていた。氷が溶けていく作品は、白布には氷が溶けていく映像が映し出され、黒布には氷が静止画でプリントされている。自分にはそれが、結婚後の男女の価値観の違いを表現しているように思えたが、そうではないとのことで、芸術鑑賞は見た側がどう感じるかなので正解はないが、まさに作家と場所のコラボが起こした現象だと思った。また、小出さんは「尼崎という言葉を意識的に用いなかった。」と言っていた。これは私も頷けるもので、作品をいろいろな地域の人に同じように見てもらいたいという思いからそうされている。言葉の展示については、誰のセリフか、性別も分からなくして、敢えて限定しないことで鑑賞者の心の中の誰かが言っているような展示にしている。展示場所は広く、すべてを使うのは難しかったらと思うが、日が差し込む場所に年表を展示し、カーテンの影が重なるようにして、展示方法が面白いと思った。
- ・A-LAB で実施していた「RE:AMA」、「まちのことづて」、そして今回の「声声が灯して」と、まちをテーマにした展示が3回連続になっており、鑑賞者としては多いなという印象だった。若い作家を応援しているようで、まちのアピールに利用していると思われまいかという心配がある。展示タイミングは全体を見て考えてもらいたいと思った。文化未来奨励賞は、鑑賞した人が「自分も応募したい。展示してみたい。」と思ってもらえるような展示ができればいい。
- ・私はストップモーション・アニメーションを制作しているが、できるまでに何年もかかるので、受賞記念展を実施するとなると本来の制作をストップしなければならなくなる。そのため、できれば今の作品制作を後押ししてくれるようなものや、完成後に発表できる機会がある方がありがたい。商業作品でなく個人作品だと、完成してから発表場所を探すので、発表の機会をもらえるのはうれしい。受賞した翌年に発表やワークショップというのは、作家によっては重荷になるので個別対応してもらえたらいいと思う。
- ・今回の展示には歴史博物館として資料提供など協力した。小出さんとお話する機会があったが、インスタレーションは難解な部分もあるが、作家とお話して理解できることもあると思った。小出さんは窓から見える景色も意識して制作したと言っていた。ワークショップのフロタージュは、人がたくさん来たそうで、地域とつながる展示になっていたと思う。
- ・近松もそうだが、情報発信に力を入れてほしいと思う。尼崎の現在のアートシーン等の情報をまとめてみんなに知らせたりつなげたりコーディネートするような人や役割が必要だと思う。そうすれば、一つ一つのことが繋がっていくと思うし、それが文化ビジョンの中で目指すべきことではないかと思う。
- ・まちで起こっていることをキュレーションする機能が必要だ。単にイベントを企画しても人はなかなか行かないが、自分の人生観を揺さぶられるものだったら行ってみようと思う。今回の

展示は委員が言われたように、個人的感情が呼び戻される展示なので、大勢での鑑賞ではなくひとりひとりの空間設定が必要だったのだと思う。鑑賞に正解はなく感じとる自分自身の中にあるということ。

- ・私は鑑賞できなかったのだが皆さんの話を聞いて、実際に行った人じゃないとできない見方があるのだなと思った。陽が当たる展示も鑑賞時間によって見方が変わるのだろう。鑑賞したら新しい自分に出会えそうな気がする。
- ・テーマ「夢へのチャレンジを応援する」に関して言うと、私が尼崎に来た時に「チャレンジを応援するまち」にしようとしたのがベースにある。それで「ティーンズサポートチケット」や白髪アウトリーチ等を始めた。白髪氏については、絵が何億円ということに意味があるのではなくて、当時足で絵を描こうとイノベーションを起こした人が尼崎にいたということ子どもたちに知ってほしいと思った。
- ・文化未来奨励賞については、表現の場を提供するというより、この賞で評価され、応援され、世界に羽ばたく機会にすることが大事だと思う。賞の名前のとおり未来を奨励するためにあるので、チャレンジを応援する尼崎だからできることを理解した上で、人を選んでほしいし応援するプログラムを提供してほしい。そう考えると、受賞翌年の発表を規定するのは違うような気がする。
- ・審査員について言えば、例えば過去に文化未来奨励賞を受賞した人が仲間を応援する枠として審査に入ってもいいのではと思った。チャレンジを応援する人を応援するというか、みんなで応援する土壌を作ることが重要。
- ・小出さんの展示は、今後なくなる場所で行われたが、これは地域の施設や場所の意味性・歴史性を感じるための感性を育てることにもつながっている。それには、地域の歴史を理解している市民や職員がいるということが大切で、その人たちが文化をつくっていく。単なるアート鑑賞ではなく、アートや文化が地域社会の根っこを支えている重要なものと、理解したり解釈したりできるような機会を作っていかなければならないと思う。
- ・色々なジャンルの芸術を幅広く取り上げることができれば、「そういう作品もOKなんだ。やってみたい。」という人が出てきてくれる。今後の受賞者にも期待したい。
- ・作品のアーカイブがあったらいいと思う。未来奨励賞は時間をかけて評価されるものなので、「昔に尼崎が目をつけていた」ということがアピールできれば、チャレンジを応援するまちのイメージにもつながる。

第4回懇話会の様子

日時 令和6年2月2日（金）14時から16時まで

場所 中央北生涯学習プラザ 3階 学習室5

出席委員 大永委員、辻川委員、中田委員、船木委員、善見委員（欠席：狩谷委員）

<大永委員による事業紹介：生涯学習プラザにおける地域活動等>

※説明資料抜粋

学び楽しみ交流する 市民を支える 株式会社ツナグ 代表取締役 大永尉恵	子育てサークルを立ち上げたきっかけ ・10代の頃、ママ友がいなかった ・地域の子育て情報がなかった ・地域の公民館などにはいなかった 無い物は作ろう！＝自分で立ち上げた 年月が経ち、子ども達も大きくなり・・・ 
尼崎市委託事業に登録する ・社会福祉協議会の方のすすめもあり子育て支援事業があることを知る。 ・生後2か月の娘、1歳の息子の時だった。 ・尼崎市開明跡地にて、子育て支援サークル尼崎市の事業として開始する。 ・色々な研修も受けました。  	子育てサークル ・開明跡地での子育て支援は、マカフェ、リトミックの先生を呼んでリトミック、県民センターからは、講師を呼んで遊びを披露してもらうことが多くありました。 ・時には、ママの研修として医師会から小児科の先生に来てもらい子どもの病気の研修も行っていたことができました。 ・公民館の事業の方とも知り合いになり、交流が広がりました。 
新しいプラザへ 移動する ・新しいプラザが出来、新しいプラザでの子育てサークルを始めました。 ・地域プラザはとてもきれいで、利用する方も喜んでいました。 ・以前の場所から遠く離れてしまった人はこれなくなるという点もありました。 	〰 持ち込み企画！ ・プラザでの持ち込み企画もやっています。 ・ハロウィンのイベントも友人に紹介して実現することができました。 ・プラザの方が親身になってお話を聞いてくださり、イベント実施することができます。 
地域のお祭りに参加 ミーツザ福祉・中央地区祭り 梅プラザまつり  	放課後等デイサービス 2016年3月開所 ・場所は、中央地区 （総合医療センターより徒歩3分） ・SST（ソーシャルスキルトレーニング） ・音楽療法士による音楽療法 ・個別指導（宿題支援・言語指導など） ・クッキング、生活動作支援 ・講師を呼んで特別プログラム実施 

ツナグひととしての仕事 ・私たちの暮らすまちには、たくさんの人が住んでいます。 ・人種、性別(多様な性)、年齢、肌の色、職業、価値観、障害も様々です。 ・『ちがいのちがいの』を知ること ・地域とつなげる、子どものツナグを育てること	 地域の関わり ・子ども食堂を昨年から開始。 ・2月は20日ではなく27日です。
--	---

意見交換の様子

- ・公民館のイメージは「暗い・汚い・愛想悪い」だったが、委員のお話を聞くと大きく変わったのかなと思った。
- ・自分は大学で作品制作を教えているが、発達障害をもった学生、学校に来れない学生や作品を見せたくない学生の相談を毎年受けていて、どうやったら学生が自分自身をアピールできるようになれるんだろうと考えている。
- ・(大永委員) 発達障害をもつ子は、自分の作品を人に見せて自分がどういう気持ちになるかが分かっていないところがある。なのでロールプレイをしてみて、「褒められたらうれしい」「注意されたら嫌だ」と気持ちを言語化するのが大切だと思う。
- ・大永委員に質問で、市役所にもっとこうしてほしいとかアドバイスはあるか？
- ・(大永委員) もっと身近に感じられるようにしてほしいと思う。気軽に相談できる窓口となってほしいし、自分たちの活動に興味をもって見に来てほしい。また自分が知りたい情報を提供してもらいたい。聞くのが苦手な人もいるので声をかけてあげてほしい。プラザに色々な資料を置いてもらっているが、手に取って読まないといけないので、もっと分かりやすくしてもらえたらと思う。
- ・尼崎市では地域課を置いて、行政の福祉や子育てなどのタテの事業を、地域を幅広くヨコで知る職員がつないでいる。改めて今回のテーマに戻るが、文化ビジョンではいわゆる狭い意味の「文化」だけでなく、日常の営みや市民の学びの広義の「文化」を支援するとしている。尼崎の日常を耕しているのは市民による地域活動であり、どんどん広げたい。先ほど委員の皆さんに感想をお聞きしたが、今度は抽象度を上げて市の文化事業をどう評価されるかお聞きしたい。
- ・アクティブに活動される方が地域にいて、そういう人たちの情報を市がどれだけ掴めるかということはずっと考えている。行政が市民に対して文化活動をしなさいというだけでは市民の文化力は上がらない。行政の力で文化活動をしている地域の人たちを把握することが目指していくことだと思う。
- ・大永委員が、最初は市の事業について知らなかったとおっしゃっていて、市の情報を必要としている市民にきちんと届けられたらいいなと思った。
- ・前回の議題で提案したいことがあったのでお話させていただきたい。尼崎市には「近松賞」という脚本の賞があるが、文楽の人形を作る担い手が不足している話を聞いて、人形づくりの賞を近松に関連して立ち上げたらどうだろうかと思った。例えば、文楽協会の方が審査員になって、授賞式・展示を大近松祭で行う等すれば面白い事業になるのでは。
- ・「市民からもっと相談しやすいと思ってもらうにはどうすればいいか」を市職員全員が考えないといけないと思った。また地域の情報を掴んでPDCAを回していくことも重要である。「開明庁舎の活

動場所が無くなって来れなくなった人がいた。」とおっしゃっていて、活動場所の距離感は大事だと思った。市としてこれ以上施設や職員を増やすのは難しいので、放課後の学校がそういった活動場所としての機能を持てればいいなと、実施するのが難しいのは承知しているが思った。

- ・大永委員はいろいろな活動のマネジメントが出来ているので、他の団体で何か活動したいと思っている人にノウハウが共有できれば、地域活動がもっと活発になると思った。
- ・地域活動を積極的にしている人と行政がどう出会えるかが重要だと思う。行政の申請がデジタル化する今、行政から関わっていき地域に出ていくのが今後の仕事の中核になっていくと思う。また地域においては、文化事業をすることが目的ではなく、事業をすることで作られる関係性にこそ意味があり、作られた関係性が更に変化し次の関係性を作っていくことが、本当の学びだと思う。以前から「グループが人を育てる」と思っており、グループの中で影響された人が次のグループを作る、そのサイクルを回すのが重要であり、行政はその支援をしていく必要がある。
- ・地域における文化事業は、ハイアートの鑑賞よりも、人々の自己表現に重点があると思う。文化事業をすることが目的ではなく、そのプロセスでの人の変化や喜びをマネジメントしてほしい。地域の人々の秘められた可能性を引き出すところで専門性を発揮し地域課と協力していけば、ビルメンテナンスだけでないプラザ運営ができると思う。

第5回懇話会の様子

日時 令和6年2月21日（水）14時から16時まで

場所 尼崎市役所 南館B1階 第1会議室

出席委員 大永委員、狩谷委員、辻川委員、中田委員、船木委員（欠席：善見委員）

＜京都大学大学院教育学研究科教授 佐野真由子氏「提言 社会の分子ではなく、分母としての文化政策」ご説明＞

提言：[20230304_policy.pdf \(kyoto-u.ac.jp\)](https://www.kyoto-u.ac.jp/20230304_policy.pdf)

意見交換の様子

- ・懇話会を通して、ありとあらゆるものが文化だと学び、逆に文化じゃないものとは何だろうと思うくらい文化は幅広い。
- ・自分は分子のひとつとして制作活動をしているが、「オリジナリティを認める文化」が根付いてほしいと思っている。今、一生懸命作った作品を発表しても、「それはあなたが作ったものだ。」と簡単に認めてもらえない状況がある。以前、10年近くかけて作った映像作品をYouTubeで配信しようとした時、他国でコピー映像がアップロードされていて、地元の警察の担当部署に削除要請するも、「あなたが作った作品であると証明してください。」と言われた。証明する書類を提出し何か月もやりとりしたが、結果的に違法アップロードを防ぐことはできず、オリジナルを無料で配信するしかないと言われた。また再生回数が増えると、映像の挿入曲を担当したアーティストにはお金は入らず、所属事務所だけに入るような仕組みになっている。市町村レベルでできることではなくて法律や著作権の話だとは思いますが、オリジナリティを認めることについて皆さんに関心を持ってもらいたい。
- ・私も元々広告業界にいたが、世の中にあるものを変化させて創作することもオリジナリティの一部ではあるし、そもそも創作が本当のオリジナルといえるのかという問題もある。そしてAIが何でも作ってしまう現代における表現・権利とは何か？ということは、人類が直面している問題である。
- ・文化といえば映画館や美術といったイメージがあり、子どもたちと文化活動する時は、作品制作したり歴史博物館に行ったりしていた。それに対して今日のお話は、具体的なものから文化の原点に導くようなお話だった。最近はインスタグラムの投稿文を書いてくれるAIがあり、考えなくても文章が作れるようになっている。しかし文化においては、なぜ自分が興味を持ったのか等について考える力が大事ではないか。文化活動をしようとなった時に、まず考えてみようということが佐野先生の冊子の答えではないかと感じた。
- ・（佐野氏）提言は抽象的に作っており、関係する項目として具体的な問題の種を所々に散らしている。一部では「この提言は抽象的でどうしたらいいのか分からない。」と言う方もいらっしゃる。そんな中で、以前勉強会に参加された方から「この提言は“出汁のきいたスープ”だ。」と言っていた。この提言の中にそれぞれが抱えている問題を入れて仕上げるという意味で、私も説明でよく使わせていただいている。政策提言なので政治や行政で勿論使っていただきたいが、それだけを目指したものではなく、学校やその他分野でも使っていただけたらと思う。
- ・最近「文化って何だろう？」とよく考える。伝統芸能の先生の中には、「自分は文化人だ。」と言う方や「日本の伝統文化を継承するものとして…」と話される方がいる。また、ジャズやポピュラー

ミュージックは音楽じゃないという方や、ジーパンでお琴を弾くなんて…と言う方もいる。私は「音楽は音を楽しむもの」で、演奏する側も聞く側も楽しければいいのではないかと考えている。文化の括りがなくなって社会に根付いてそれが当たり前のことになったらいいと思う。音楽家たちはコロナ禍で演奏ができない時、「私たちに助成金を」と自分たちのことだけになってしまった。活動する側も視野が狭くなりがちなので、私たち自身も括りを取っていかないといけないと思った。

- ・(佐野氏) コロナ禍では、当事者が自身の活動予算を上げてほしいと要求する際、「他の分野よりどれだけ喫緊か」ということが議論になっていた。そうなる前に、もっと大きな土台で「文化はなくてはならないものだ」と考えることで、もっと強い理由付けを作ることができるのではないかと私は思っている。コロナ禍でドイツの大臣が「文化は万人にとってのパンだ」と発言し、日本でもそれに乗じた議論をしていた時期があった。私も当時、記者から「芸術活動を維持するためにどういう理屈が立つか」ということを聞かれ、最初は整理できていなかったが、ある段階からは、「文化はパンや薬とは違う」と堂々と言えればいいのではないかと考えるようになった。確かに、文化は無いと明日死ぬというものではないが、よりよい生き方のためには絶対に必要なものであると、割り切った論じ方をしたほうがいいのではないか。
- ・まず先ほどの委員のお話に関して、ここ最近、芸能や漫画の業界で人権がないがしろにされる問題が発生している。記者会見を見たところ、被害を受けた方を支援する弁護士の中で法整備を進める動きがあるそうだ。韓国は法整備がなされており、芸能人の自殺など問題は発生するのだが訴訟ができて当事者が泣き寝入りしないようになっている。日本もようやく問題提起されたので、大きな枠組みの中で整備されていけばいいと思う。
- ・提言のお話で、まず、人々の生き方や社会の仕組みの根本的な考え方という点でいうと、SDGsと同じではないかと思った。2つ目に、この提言の主人公は誰なのかということだ。先ほどスープのお話があったが、あらゆる分野に応用できる枠組みだということをもう少し意識的に打ち出した方がいいのではないか。それは文化ビジョンも同じで、誰が主人公で行政がどういう位置づけかということを実感的に考えるべき。施策を打ったら実現するというものではないと言うべきではないかと思った。
- ・(佐野氏) 尼崎市の文化ビジョンを拝見して、私たちの提言と似ている部分が多々あった。一方で違いもあり、私たちの提言は、悪い言い方をすると言いつばなしのようだが、広い「文化」というテーマを貫いたつもりである。そして文化ビジョンでは、前半は広義の「文化」について書かれ、後半は施策に落とししていくように書かれており、文化の「分子」と「分母」の間を揺れ動いているように見えて、それはとても興味深いことだと思った。提言では広い「文化」について投げかけているのだが、もっと皆さんに使っていただくにはどうすべきだと思われるか？
- ・今の提言だと、地方自治体か、国か、社会全体に向けてなのか見えず、結論は行政に向いているのでよろしくないのではと思う。自治体の立ち位置がどこで、どうつながっているのかが見えたら良いのではないか。
- ・(佐野氏) 提言をまとめる中で、文化庁のしていることを広げるのが自治体なのではないかと思った。また、文化の範囲を広げるということは文化庁を大きくすることではないということを提言ではっきりと言っている。提言では、文化庁はひとつの分子として機能し、俯瞰的に見ているリーダーが総合的なビジョンをもって動かしていくことを示している。しかし自治体において実現するのは難しいのだと思った。

- ・私が感じたことは、「表現する人たちが素直に自己表現をできる社会」を作っていきたいということだ。尼崎はオープンでフランクな地域性がある一方で、外から人が流入し適度な距離感もあるという不思議な地域性がある。そんな場所で人々が表現したことが自治と学びにつながり、それが積み重なったものが時間軸で見ると文化になる。行政施策ではどうしても単年度の議論になってしまうが、文化は時間軸の話である。分子の「文化」を経験した子どもたちが未来につながり、親が自分のこれまでの過去とつながる。そうやって文化活動をする人々が様々なことを確認してアイデンティティを強化できれば、地域の狭義の「文化」が大きな「文化」を支えることができる。それを地域でやってもらいたいと思う。
- ・ユネスコが提示した「学習権」という言葉がある。「学習という行為は～中略～人類を出来事に翻弄されている客体から自らの歴史を創造する主体へと変える。」という内容で、これはまさに自治の基本であると思う。素直に思ったことを表現してみんなでこうしていこうというサイクルを回すことが重要。尼崎でいうと白髪氏が足で絵を描くことを始めた。我々が暮らす空間でそれが起きていたということが、我々のアイデンティティ・誇りになる。
- ・佐野先生の提言で面白いと思ったのは、『5.「余白」の多い社会を』の部分だ。「余白」のある社会を作ることは本当に大事だと思っていて、今効率を追い求めて無駄を排除した社会が作られているが、それではシミュレーションしたことしか生まれない。希望のある未来を作るには「余白」が大切だと思う。知り合いの美大の先生が、「美大生の3要素は、『右に倣わない、正解を目指さない、空気を読まない』だ。」と言っていた。これはみんなが子どもの頃には持っていて、社会化されていくプロセスで消えてしまうが、お互いが寛容になって受け止める地域づくりを進めていきたい。
- ・尼崎では、「困難を乗り越えネガティブをプラスに変えてこの町の市政をつくる」ということが個別政策に埋め込まれている。社会の目標をただ達成するのではなく、その土地なりのやり方で解決できるようになれば、自ずと政策の中に文化的なアイデンティティを埋め込むことができる。改めて「文化」は、狭義の「文化」だけでなく地域に流れている物語を背景にしたものではないかと思う。それが地域で共有できればまち全体の基盤になる。今はその過渡期である。